

那珂 39

—那珂遺跡群第94次調査報告—

2005

福岡市教育委員会



道路路号 NAK-94
道路調查番号 0361

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡群第94次調査においても、発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、川邊俊範様をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成15年度に博多区竹下5丁目283-1、284-1において実施した那珂遺跡群第94次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸が行った。
3. 遺物の実測は長家が行った。
4. 製図は長家が行った。
5. 写真は長家が撮影した。
6. 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から6°西偏し、真北から6°18'西偏する。なお座標は日本測地系を使用している。
7. 本書で用いる遺構番号は通し番号にし(一部欠番あり)、報告の際には遺構の性格を示す略号をして表記している。略号は竪穴住居跡(S C)、井戸(S E)、土坑(S K)、溝(S D)、ピット(S P)である。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9. 本書の編集・執筆は長家が行った。

遺跡調査番号	0361		遺 跡 略 号	NAK-94	
所 在 地	博多区竹下5丁目283-1、284-1		分布地図番号	37-0085	
開 発 面 積	419.05m ²	調査対象面積	242m ²	調 査 面 積	250m ²
調 査 期 間	平成16年1月8日～平成16年2月18日		事前審査番号	15-2-675	

本文目次

I	はじめに	1
1	調査にいたる経過	1
2	調査体制	2
II	調査の記録	5
1	調査経過	5
2	遺構と遺物	5
1)	竪穴住居跡	5
2)	井戸	10
3)	土坑	13
4)	溝	15
5)	その他の遺物	18
6)	小結	18

挿図目次

第1図	調査区位置図1 (1/50000)	2
第2図	調査区位置図2 (1/8000)	3
第3図	調査区位置図3 (1/500)	4
第4図	調査区全体図 (1/100)	折り込み
第5図	S C004及び出土遺物実測図 (1/50、1/3)	6
第6図	S C006及び出土遺物実測図 (1/50、1/3)	6
第7図	S C007・008実測図 (1/50)	8
第8図	S C007・008出土遺物実測図 (1/3)	9
第9図	S C013実測図 (1/50)	10
第10図	S E014及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)	11
第11図	S K003・010・011及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	12
第12図	S D001土層断面図及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	14
第13図	S D002土層断面図及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	15
第14図	S D009断面図及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	16
第15図	S D012断面図及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	16
第16図	その他の出土遺物実測図 (1/3)	17

写真目次

写真1	調査区西半部全景（東から）.....	19	写真9	S E014（北から）.....	23
写真2	調査区西半部竪穴住居跡群（西から）.....	19	写真10	S K003（東から）.....	23
写真3	調査区東半部全景（西から）.....	20	写真11	S K011（西から）.....	24
写真4	調査区東半部 S C013周辺（南から）.....	20	写真12	S D001東半（西から）.....	24
写真5	S C004西半（南から）.....	21	写真13	S D001土層1	25
写真6	S C004東半・S K010（南から）.....	21	写真14	S D001土層2	25
写真7	S C007・008（南西から）.....	22	写真15	S D002東半（西から）.....	26
写真8	S C013（西から）.....	22	写真16	S D012（西から）.....	26

I はじめに

1 調査にいたる経過

平成15年10月20日付けで川邊俊範氏より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区竹下5丁目283-1、284-1の物件に関して、共同住宅建設に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号15-2-675）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群（分布地図番号37-0085・遺跡略号NAK）に含まれている地点であり、北側に隣接する那珂保育所建設時に行われた第23次調査においては非常に濃密な遺構群が確認されている。この申請を受けて埋蔵文化財課では申請者と協議の上平成15年11月6日に申請地内の試掘調査を行い、現況地表面から30～125cmほどの鳥栖ローム層上面で豊穴住居跡・ピット等の遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、平成15年度に発掘調査、平成16年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。なお申請地419.05m²のうち、調査対象としたのは建物建築部分の242m²で、駐車場等として使用される残地については、遺構面まで工事の影響が及ばないため現状保存することとしている。

調査期間は平成16年1月8日～平成16年2月18日である（調査番号0361）。調査面積は250m²、遺物はコンテナ13箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては川邊俊範様をはじめとする関係の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2 調査体制

事業主体 川邊俊範

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文課財課長 山崎純男（前任） 山口謙治（現任）

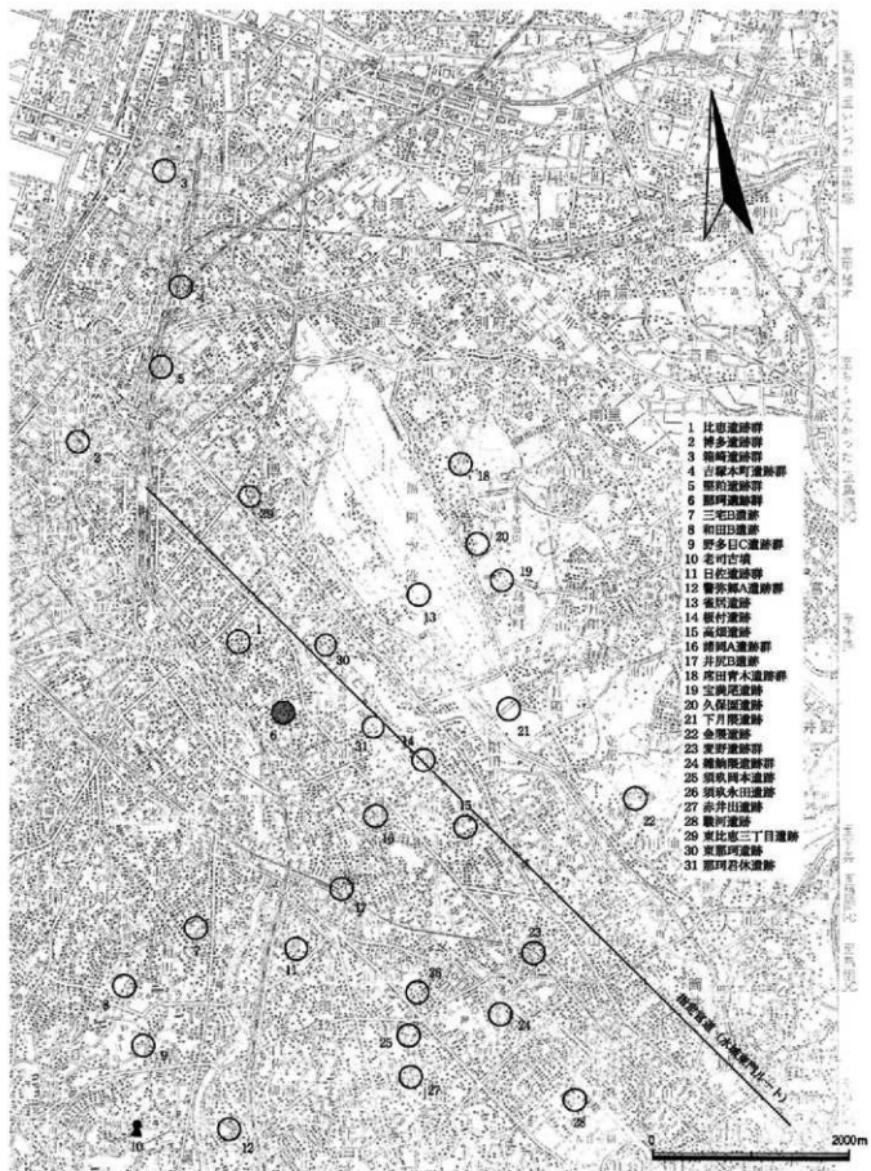
調査第2係長 田中壽夫（前任） 池崎篤二（現任）

調査庶務 文化財整備課 御手洗清

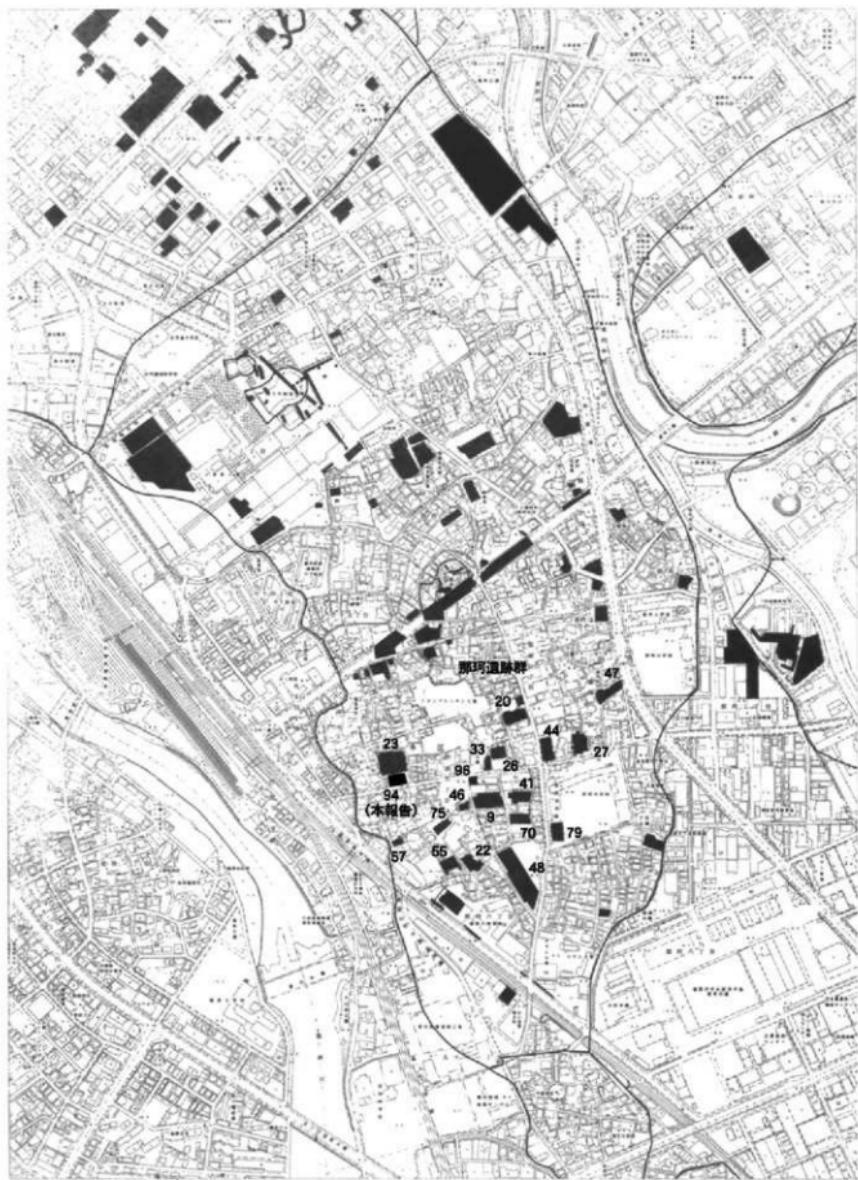
調査担当 調査第2係 長家伸

調査作業 澄川アキヨ 中村フミ子 岩本三重子 越智信孝 藤野トシ子 中村サツエ

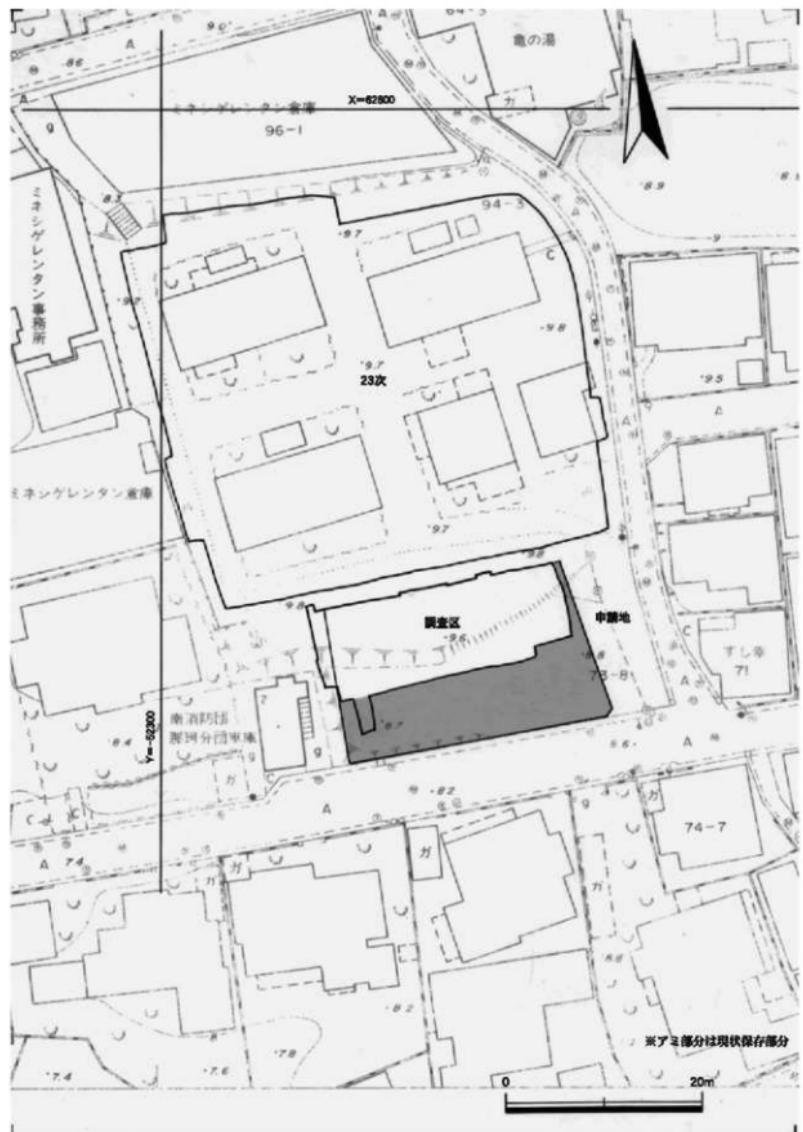
藤野幾志 西川シズ子 宮崎幸子 乗野孝子 中島道夫 川下信弘



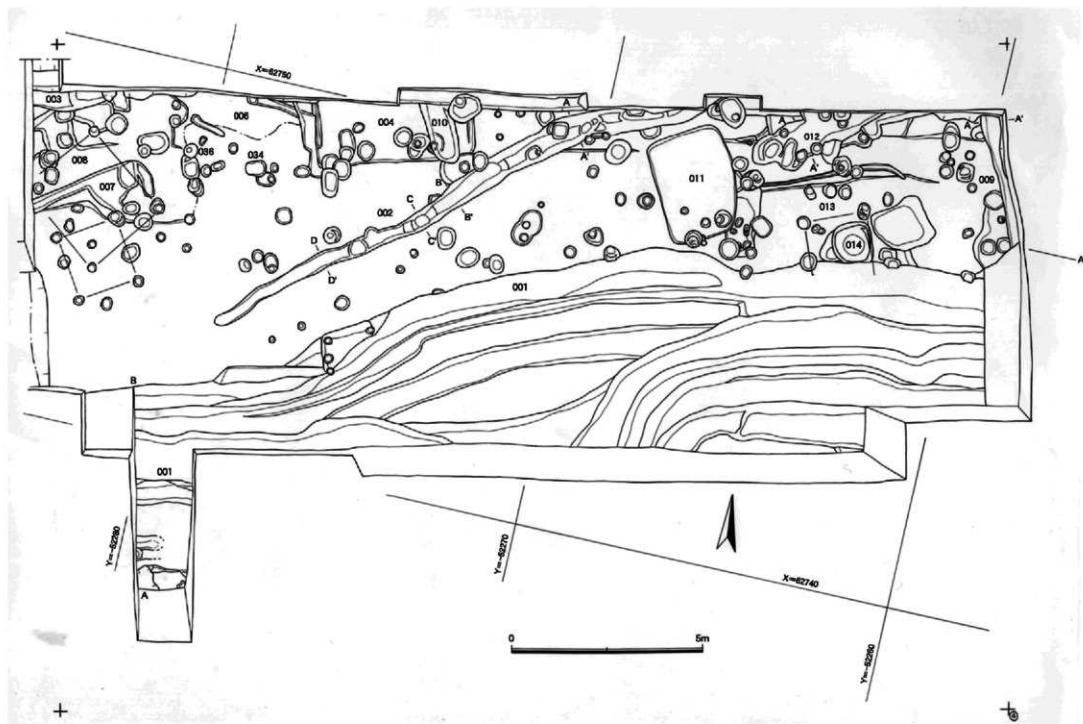
第1図 調査区位置図1 (1/50000)



第2図 調査区位置図2 (1/8000)



第3図 調査区位置図3 (1/500)



第4図 調査区全体図 (1/100)

II 調査の記録

1 調査経過

那珂遺跡群は福岡平野の中央部分を北流する那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に立地する遺跡群である。丘陵の基盤層は花崗岩礫層で、この上面に阿蘇噴火火砕流・火山灰である八女粘土層・鳥栖ローム層・新期ローム層が堆積している。北側に隣接する比恵遺跡群とは一連の丘陵上の遺跡群を構成するものと考えられ、その範囲はあわせて南北2.4km、東西1kmに及ぶと考えられる。

今回の調査対象地はこの丘陵の南側に位置する。周辺の調査事例は各報告書に詳述されているのでそれを参照いただきたい。ここでは北側に隣接する第23次調査について簡単な概要を述べておきたい。調査面積は1428m²で、丘陵高位部分にあたり削平が著しく遺構の遺存状態はよくなかったものの、全体に濃密な遺構群が確認された。遺構は弥生時代～中世まで見られ、竪穴住居跡51棟、掘立柱建物8棟、井戸4基、溝25条等が確認されている。時代ごとにみると弥生時代は環濠、大型掘立柱建物、古墳時代は5～6世紀代に大規模な竪穴住居跡群が形成され、この後7世紀代には3連棟の大型建物と共に伴う区画溝が認められる。古代には規模縮小するが、中世になると再び井戸・ピットが確認される。

申請地は調査前には駐車場として使用されており、現況地表面標高は9～8.8m前後を測る。調査は重機による表土除去から行うこととした。廃土処理の関係上西半部分の調査を行った後、土砂を反転して東半部分の調査を行った。遺構面は盛り土・旧水田土除去後の鳥栖ローム層上面であり、遺構面標高は北側で8.8m、南側で8mを測り、北から南に向けて傾斜している。削平も進んでおり細かな地形復元はできないが、調査区南側には東西方向にのびる丘陵鞍部が形成されているようであり、SD001に設定したトレンドチでその一部が確認できた。また第23次地点同様削平により高所部分の遺構遺存状態は不良である。大まかな遺構配置としては、調査区北端部分は遺構の切り合いで著しいものの中央部分では遺構配置が散漫となっている。また丘陵鞍部にかかると考えられる南側には埋没後に大溝が掘削されている。検出遺構は竪穴住居跡、井戸、溝、土坑、ピットがある。出土遺物は弥生時代中期後半及び古墳時代のものが中心となり、中世土器・陶磁器も少量見られる。

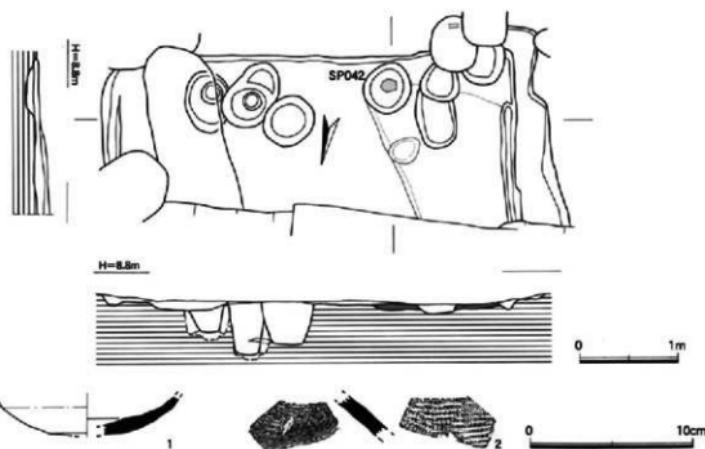
2 遺構と遺物

1) 竪穴住居跡

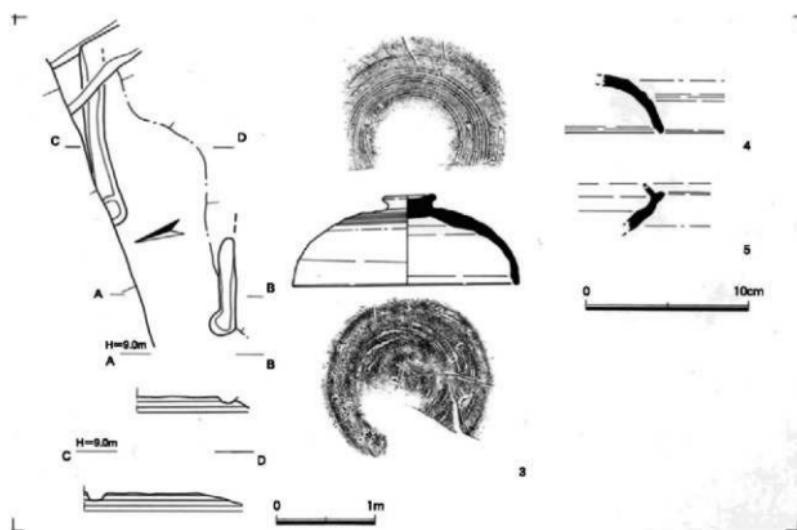
竪穴住居跡は報告分で5棟検出しており、時期的には古墳時代後期のものが主体を占めると考えられる。遺存状況は不良であり、正確な規模・形状等が不明なものが多い。また今回報告できなかったものの中にも削平等により、住居と認定できなかったものがあると考えられる。調査区北側1/3を中心として丘陵高所部分には本来多くの遺構が存在していたものと想定でき、ここで報告できたのはその一部に過ぎない。また掘り下げを遺構プランが不明瞭なまま行ってしまったため、遺物が混入したものもあると思われる。

S C004 (第5図)

調査区北側中央部分で検出する。平面的にはSC006→SC004→SK010の関係となる。東西長4.2mを測る方形住居跡の南半部分と考えられる。埋土はローム混じりの黒褐色土で、東西両壁際に壁溝を有する。南壁際のSP042は径50cm、深さ5cmを測り、浅皿状の掘り方である。埋土は炭を少量含む黒褐色土で、底面に径10cm程の範囲で被熱痕跡が残っている。埋土及び周辺に粘土・焼土は認められないが、竪穴住居跡に伴う火所の可能性が考えられる。主柱穴は現状では明らかでない。床面西側にはロームブロック混じりの貼り床が行われる。また西側に一段深い壁が確認できるが、本来はSC004と切り合う竪穴住居跡の一部である可能性も考えられる。古墳時代後期に位置付けられる。



第5図 S C004及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)



第6図 S C006及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)

出土遺物（第5図） 1は須恵器坏身の破片である。灰白色を呈し、胎土は精良である。外底面に回転ヘラ削りを行う。2は須恵器甕の胴部破片である。外面は擬格子の叩きを行い、内面は当て具痕跡をナデ消している。灰白色を呈し、胎土は精良である。

S C006 (第6図)

S C004の西側で検出する。ローム粒混じりの暗褐色土を除去したところで、ほぼ平坦な床面上に2条の壁溝状の掘り込みを確認した。南側が削平されていることと、東西の切りあいのため住居壁が不明なため本来の住居形状は明らかでない。溝が僅かに平行していないことから複数棟の住居跡の切り合いである可能性も考えられる。調査区内で主柱穴は認められず、北側に残りの部分が展開しているようである。古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物（第6図） 3～5はいずれも須恵器である。3はつまみを貼り付ける蓋である。天井部外面は回転ヘラ削りを行った後、幅1.5cm程度のカキ目を施す。また天井部内面にはカキ目に対応するように、当て具状の痕跡が認められる。口縁端部内面には僅かに窪んでいる。4は天井部外面に回転ヘラ削りを行う坏蓋である。天井部との境には僅かな張り出しを有する。また口縁部内面には段をつけている。灰白色を呈し、胎土は精良である。5は短く内傾する立ち上がりを有する坏身である。外底には回転ヘラ削りが認められる。

S C007 (第7図)

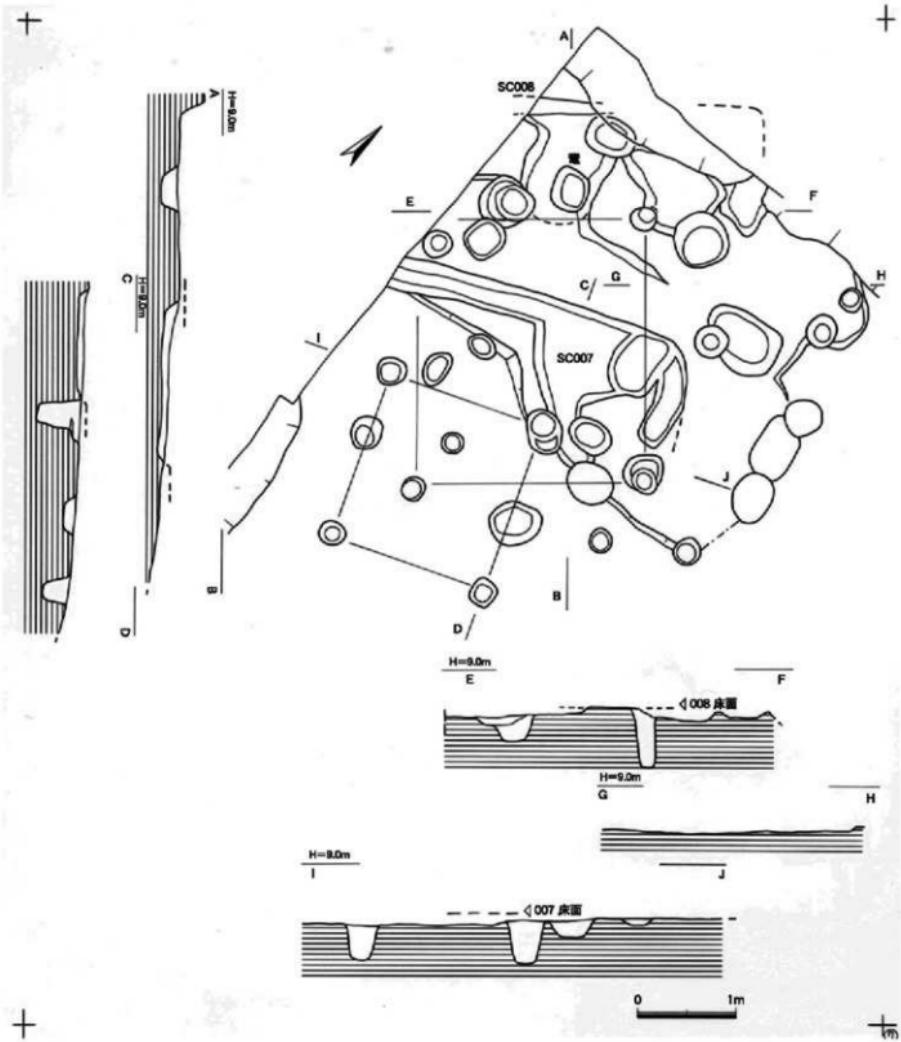
調査区西端で検出する。北東側の壁溝及びコーナー部分が確認でき、この部分の埋土はローム粒混じりの暗褐色土である。南側は削平のため床面の大半を欠失しているが、4本柱に復元できる。これから住居規模を復元すると一辺4m程度の方形プランと考えられる。甕等の痕跡は確認できていない。図示し得る遺物は少ないが、壁溝・主柱穴から須恵器・土師器の小破片が出土している。古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物（第8図 6） 壁溝部分から出土した土師器甕である。摩滅が進み器面の調整は不明瞭である。にぶい橙色を呈し、胎土には石英微砂粒を含んでいる。

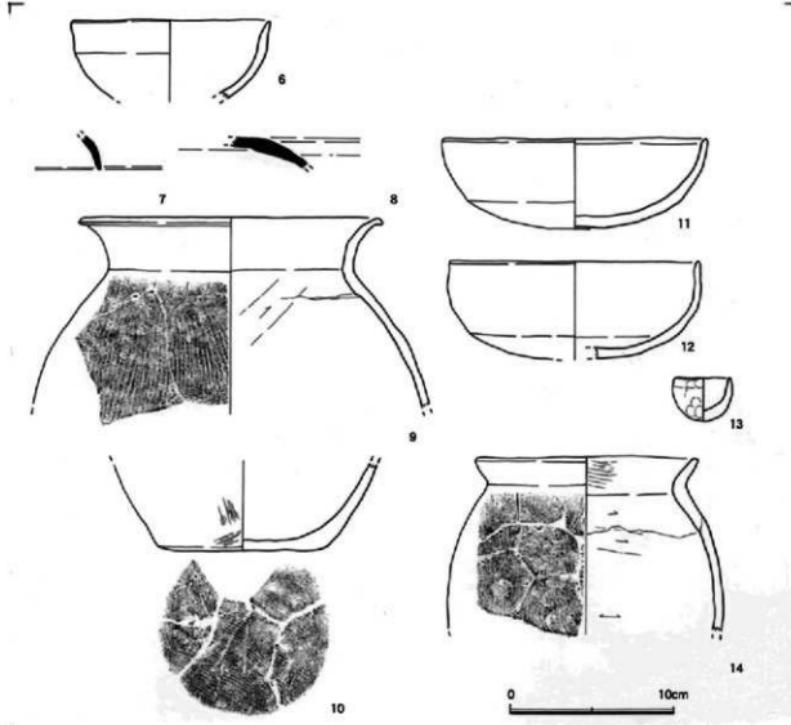
S C008 (第7図)

S C007の北側に位置する。S C003に切られるが、S C007との先後関係は不明である。埋土はローム粒を含む暗褐色土である。床面の凹凸は貼り床を除去した可能性も考えられるが、埋土に明確な差は認められなかった。北壁際に粘土粒及び焼土ブロックが広がる部分があり甕と考えたが、袖部分は残存しておらず、掘りあげた結果深さ10cm程度の浅い掘り込みとなった。掘り下げ中及び床面に被熱の痕跡は認められず、甕は完全に破壊されたものと考えられる。4本柱に復元可能で、これより住居規模は一辺5m前後になるものと考えられる。また切り合い不明のまま東側も続けて掘り下げを行っている。本来はS C008と異なる複数の住居の一部であると考えられるが、ここで明らかにすることはできなかった。出土遺物中には須恵器破片は僅少であり、土師器・弥生土器片が多くを占めている。この傾向は本調査区北側に位置する竪穴住居跡全体にいえることであり、隣接する第23次調査南端で検出したSD44（弥生時代中期末の遺物を主体とする大溝）の影響であろうか。古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物（第8図 7～14） 7・8は須恵器坏蓋である。7は口縁端部を丸く納めている。8は外面天井部との境に回転ヘラ削りを行うが、中央部分は切り離し後未調整である。共に灰色を呈し、胎土は精良である。9～13は埋土掘り下げ中に出土した土師器である。9は甕である。口縁端部は嘴



第7図 SC007・008実測図 (1/50)

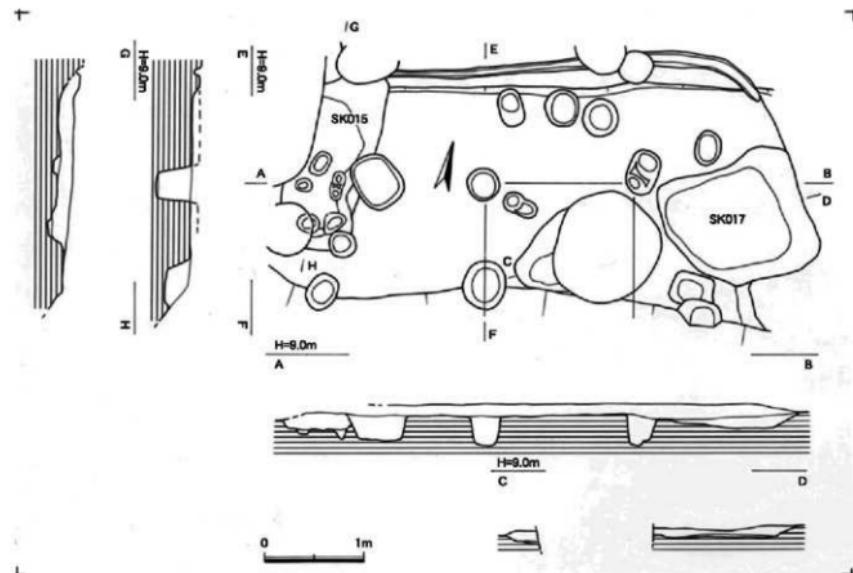


第8図 S C007・008出土遺物実測図 (1/3)

状に引き出して整えている。同部は外面縦刷毛、内面ヘラ削りを行っている。10は平底の底部である。外底部分には全面に刷毛目を行う。11・12は楕である。11は摩滅が進んでいるが、胎土精良で器面は磨きにより平滑化しているようである。12はやや深めの器形となる。内外面ヘラ状工具によるナデにより全面を整形している。13は手づくねの楕である。14は竈部分と考えられるくぼみから出土した甕である。2次焼成により器面が赤化している。胴部外面は叩きによるものであろうか。内面はヘラ削りを行う。また口縁部内面にも刷毛目が残る。

S C013 (第9図)

調査区北東側で検出する。壁溝を有する北壁部分を確認するが、削平により床面のほとんどを失っている。東西にS K015・017の土坑があるが、にぶい黄褐色土に暗褐色土ブロックを含む貼り床状の埋土と位置的な関係から、これをS C013に伴う貼り床と判断した。この結果やや歪んだ四角形プランとなり、東西長5.3mを測る。主柱は4本と考えられるが、南側2本はSD 001により削平され



第9図 SC013実測図 (1/50)

ている。出土遺物は小破片が少量のみで時期不詳であるが、須恵器の出土は見られず、貼り床と考えられるSK017がSE014に切られることや4本柱に復元できることなどから、弥生時代後期に位置付けられるものと考えられる。

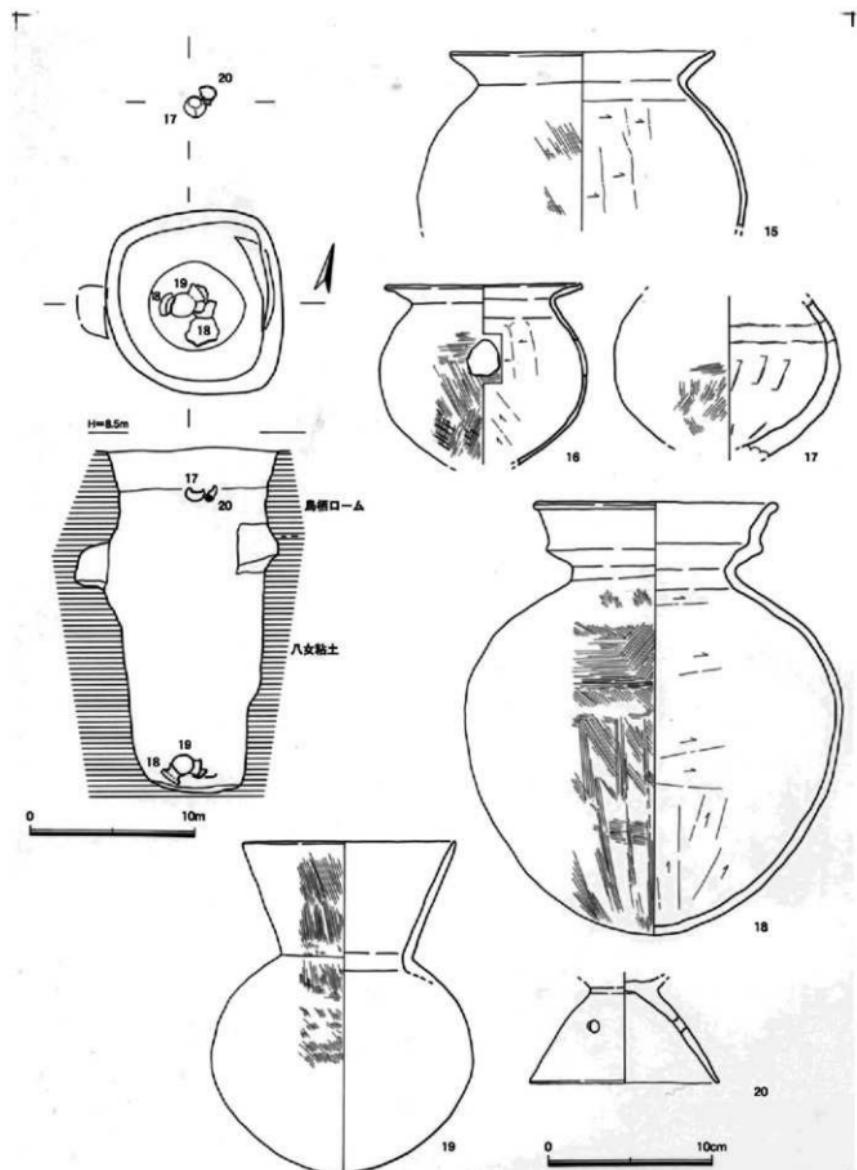
2) 井戸

SE014 (第10図)

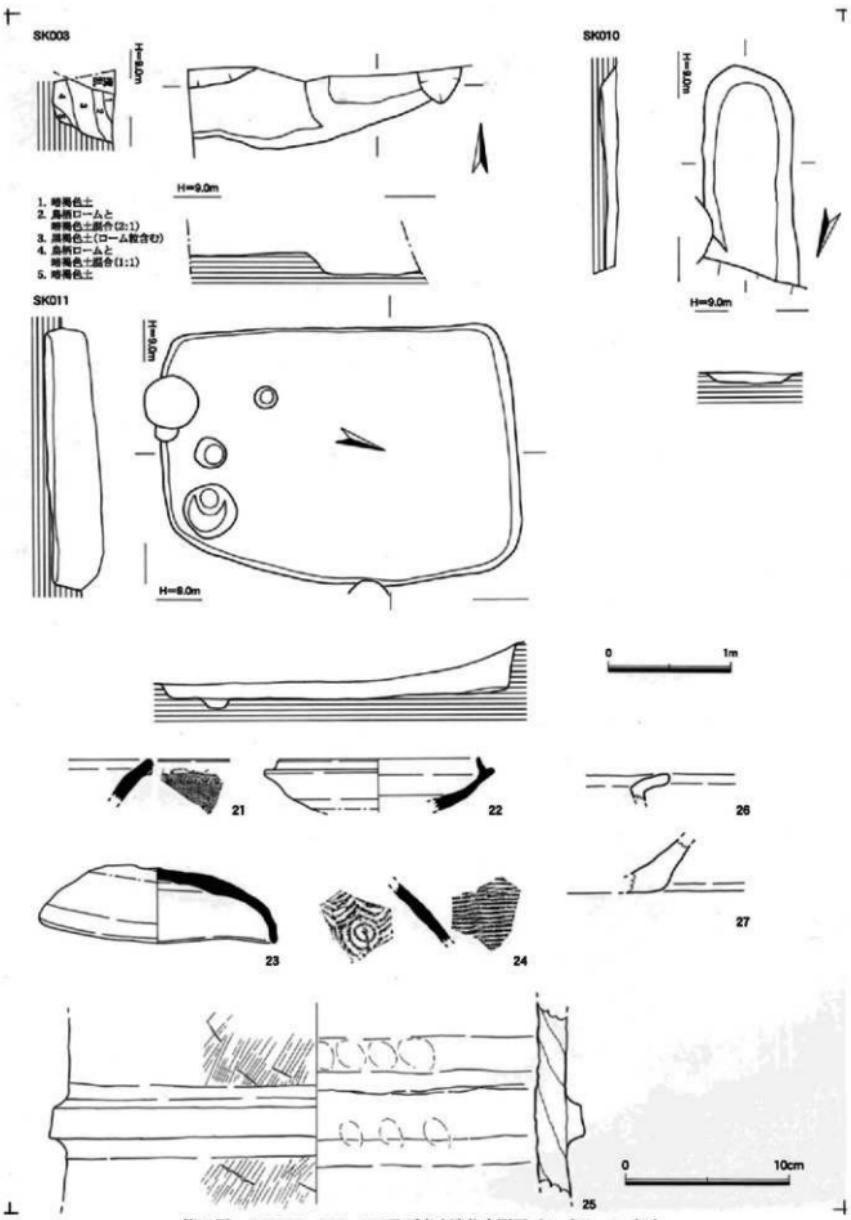
調査区北東側で検出する。平面形は長さ1.1mの円形よりも隅丸方形に近い形をしている。検出面からの深さは2.2mを測る。壁面はほぼ真直ぐに掘り下げられるが、鳥栖ロームと八女粘土の境あたりの対応する2箇所に足掛け状の掘り込みが行われている。埋土はおおよそ1層(検出面～-60cm)：ロームを含まない黒色土、2層(-60～-150cm)：ローム小粒を含む暗褐色土、3層(-150～-180cm)：黒色土に白色ロームブロックを含む、4層(-180～底面)：白色ロームと黒色土混合に分けることができる。底面からやや浮いた4層中から遺物がまとまって出土している。また現状では湧水は認められない。古墳時代初頭に位置付けられる。

出土遺物 (第10図)

15～17は甕である。15は口縁部がやや外反気味に屈曲し、端部は丸く納めている。胴部は外面に継刷毛の痕跡が認められる。内面には横方向のヘラ削りを行う。石英砂粒を多く含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。16・17は小型品である。16は薄手のつくりである。口縁部は端部上面を僅かにつ



第10図 SE014及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)



第11図 SK003・010・011及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

まみ出している。胴部は焼成後の穿孔を1孔有している。調整は外面上半1/3は横刷毛、それ以下には縦刷毛が行われており、下半には縦刷毛前の叩き痕跡が残っている。内面は上半が横方向、下半が斜め方向のヘラ削りを行う。17は口縁部を欠失している。また底部も貼り付けによるもので、そこから剥落している。外面ヘラナデを主体とし、部分的に刷毛目が残っている。内面には連続した小口痕跡が認められる。18はにぶい黄橙色を呈する二重口縁壺である。口縁端部は外側に引き出して納めている。胴部は卵形に近く、外面の上半は縦→横の刷毛目、下半は縦刷毛を行っている。内面は上半が横方向、下半は縦方向のヘラ削りを行っている。19はほぼ完形の直口壺である。色調は橙色を呈するが、器面の剥落が進んでいる。外面には細かい刷毛目痕跡が残されている。20は焼成前穿孔(3カ所)が行われている小型器種の脚部である。内外面2次的な被熱のため淡赤橙色を呈する。

3) 土坑

S K003 (第11図)

調査区北西隅で検出する。当初整穴住居として掘り下げを行ったが、やや形状が壺となるためここでは土坑として報告する。S C008→S K003となる。南壁の一部を確認するのみで、北側は保育所の擁壁工事により擾乱されている。床面は東側が一段低くなり、この部分の埋土(4・5層)は貼り床状の混合土である。古墳時代後期(小田編年IV期)に位置付けられる。

出土遺物(第11図 21・22) 共に須恵器であり、色調は暗青灰色を呈する。21は口縁部破片で、外面に波状文を施している。22は短く内傾する立ち上がりを有する坏身である。外底面には回転ヘラ削りが認められる。

S K010 (第11図)

S C004→S K010となる溝状の土坑である。幅70cm、検出面からの深さ15~20cmを測り、断面浅皿状を呈する。埋土はロームをほとんど含まない黒褐色土である。古墳時代後期(小田編年IV期)に位置付けられる。

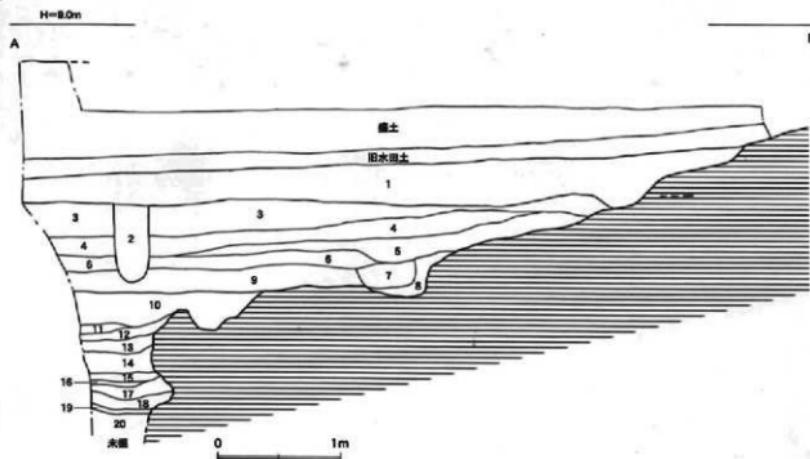
出土遺物(第11図 23~25) 23・24は須恵器である。23は焼け歪みの著しい坏蓋である。天井部外面の回転ヘラ削りは中央部分にまでは施されておらず、ここはヘラ切りのまま未調整となっている。24は壺の胴部である。外面は平行叩き、内面には當て具根が残る。25は円筒埴輪胴部破片である。外面は縦刷毛を施した後突帯を貼り付けている。突帯は高さ1cm、上端幅1.7cm、下端幅3cm強の断面台形を呈するが、上端面はナデにより窪んでいる。内面は横方向の指ナデ及び指押さえにより整形し、粘土の接合痕が認められる。内面灰白色、外面淡橙色を呈し、胎土には石英砂粒が多く含んでいる。

S K011 (第11図)

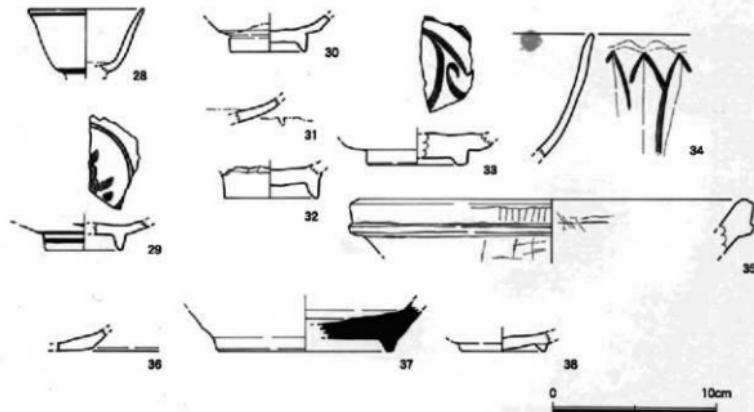
調査区北側で検出する。長軸2.85m、短軸2.1mの隅丸長方形を呈し、壁高40cmを測る。壁は直立し床面は凹凸がほとんど見られず平坦である。埋土は暗褐色土で径1~2cmのロームブロックを多く含んでいる。小型の整穴住居の可能性も考えられる。遺物量は比較的少であるが、須恵器は1点のみの出土で、混入の可能性が高いと判断される。出土遺物は弥生時代中期後半代のものが主体を占めるが、S K015との切り合いを考えると、弥生時代後期以降の可能性も考えられる。

出土遺物(第11図 26・27)

26は逆L字状に屈曲する壺の口縁部破片である。27は平底の底部である。残存部分は内外面指ナデによる調整が行われている。



1. 灰味を帯びた褐色土
 2. しまりのないにぶい褐色土(層削)
 3. やや灰味を帯びた茶褐色土
 4. 3層よりやや暗い
 5. ローム小粒を含む灰褐色土
 6. 黒褐色土
 7. 灰褐色土
 8. 灰味を帯びた茶褐色土)溝状となる
 9. 8層と同じ
 10. ロームブロックを含む暗褐色土
 11. 10層より黒味が強い
 12. 10層同じ
 13. ロームブロックを含む黒褐色土
 14. 10層同じ
 15. 粗砂
 16. 灰色粘土
 17. 淡灰色シルト
 18. 粗砂
 19. 淡灰色シルト
 20. 粗砂



第12図 SD001土層断面図及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

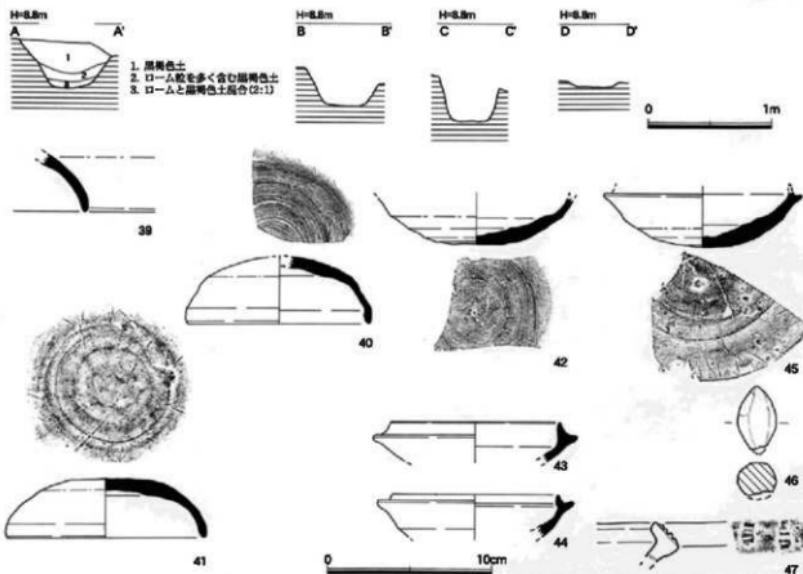
4) 溝

S D001 (第12図)

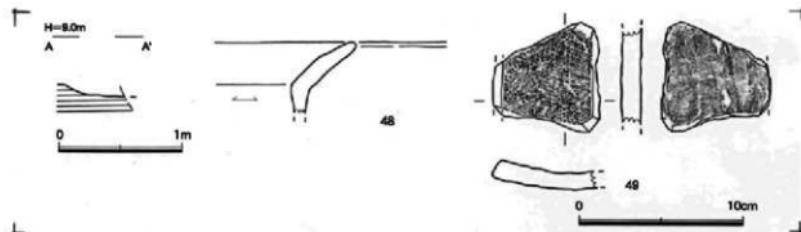
調査区南側低位部をやや蛇行しながら東西方向に延びる溝である。北壁のみを確認しており、南壁は調査区外に位置する。堆積状況を確認するため、西側にトレンチを設定し、掘り下げを行っている。

1・2層は溝埋没後に水田として使用された痕跡と考えられ、この水田は少なくとも近世までは機能していたものと考えられる。またこの段落ちの痕跡が近年まで残っており、道路台帳等に図示されていた（第3図参照）。3～9層が人為的に掘削された溝の埋土であろう。壁面は緩やかに立ち上がり底面はほぼ平坦な、開き気味の逆台形の断面を呈している。埋土は灰色土～茶褐色土を基本とし、砂の堆積は認められない。また底面には数条の溝状の窪みが残されている。10層以下は壁面の形状や埋土が明確に分離できることなどから、地山鞍部に形成された流水路の痕跡と考えられる。シルト・粗砂層が互層状に堆積し、壁面も大きく抉られている。出土遺物は1層には近世陶磁器、3～9層には中世陶磁器類、10層以下には古墳時代後期～古代の土師器・須恵器を主体として、中世前半代の瓦器・土師器が少量含まれている。

以上の状況から流水路が埋没して鞍部となった部分を踏襲して中世に濠状の溝を掘削したものと考えられる。北側に位置する23次調査地点では14世紀代の井戸及び中世の柱穴群が確認されている。またピット群の東側に位置する幅2.4m、深さ30～40cmのS D96は本溝S D001には直交するものであるが、これも7世紀代の直線溝S D89をほぼ踏襲するように掘削されている。中世溝は屋敷地を区画するものと考えられ、古代の区割りが何らかの影響を及ぼした可能性も考えられる。また那珂



第13図 SD002土層断面図及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)



第14図 SD009断面図及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

遺跡群内では中世後半代を中心として幅広の逆台形を呈する溝やV字条溝が何箇所かで確認されており、相互の関係も注目される。

出土遺物（第12図） 28・29は1層出土、30～35は3～9層出土、36～38は10～20層出土遺物である。

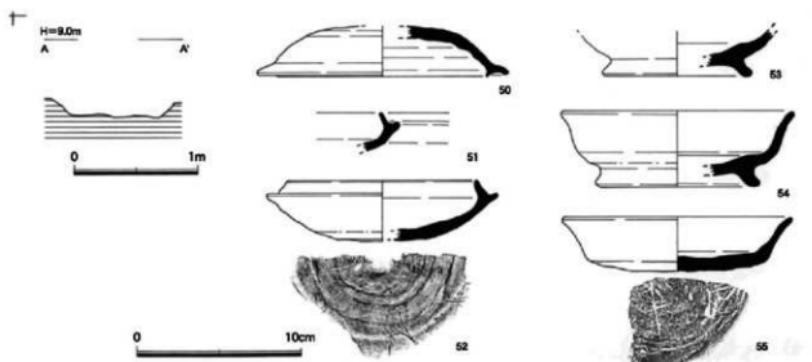
28・29は染付である。28はぐい呑みである。胎土白色で、口縁部外面及び下端部分に青色圖線を有する。29は皿である。胎土はやや灰色を帯びる。内底圓線内に施文し、外面は高台部分に2条の圖線をめぐらせ、胴部にも文様が認められる。

30は上層より混入した陶器の碗であろうか。胎土は精選された灰白色を呈する。釉は外面オリーブ黄色、内面は灰白色を呈する。31は青みをおびた釉調の白磁皿である。内面は釉剥ぎし、外面下半は露胎となる。32は胴部を全て打ち欠いた白磁碗高台である。高台外面には施釉されていない。33・34は龍泉窯系青磁碗である。33は底部破片で高台外面まで施釉され、内底には片彫りの花文を施す。34は鏡連弁を有する。35は鰐付きの滑石製石錠である。

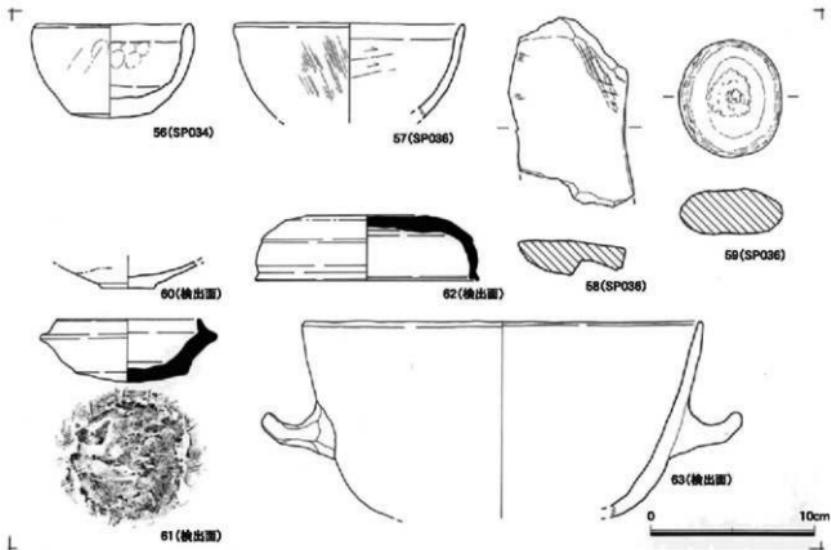
36は摩滅が進み調整は不明であるが、土師器壺であろう。37は須恵器壺の底部破片である。外底はへら切り未調整である。38は瓦器楕底部である。

S D002（第13図）

調査区中央で検出する。北東高位部から南西低位部に掘削されており、低位部では自然に途切れて



第15図 SD012断面図及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)



第16図 その他の出土遺物実測図 (1 / 3)

いる。底面には大きな凹凸が見られるが、およそ幅70cm、検出面からの深さ40cmを測る。隣接する第23次調査では確認されておらず、現状の境界付近を東方向に延びていくものと考えられるが、時期的に23次 S D89とほぼ同じであり、これと関連を有する可能性も考えられる。小田編年IV期の土師器・須恵器が出土している。

出土遺物 (第13図) 39~44は須恵器である。39~41は壺蓋である。天井部外面には回転ヘラ削りが行われている。42~45は立ち上がりを有する壺身である。外底面には回転ヘラ削りが行われる。46は土製投擲である。部分を欠くが重量20gを測る。47は弥生時代の複合口縁壺の口縁部である。外面に横方向の刻みを施した板状粘土を貼り付けている。

S D009 (第14図)

調査区東壁に平行して確認した溝である。西壁のみ確認しており、方位をN-18°-Wとする。深さは5cm前後しか残っておらず、底面はほぼ平坦である。埋土はロームをほとんど含まない褐色土である。位置的には23次 S D89の延長と考えられ、上層埋土の一部を確認したものであろう。方位は東に振れている。出土遺物はほぼ同時期である。

出土遺物 (第14図) 48は土師器壺の口縁部である。胴部内面は横方向のヘラ削りを行う。49は平瓦である。凹面には布目と模骨根が認められる。凸面は縦方向のナデによる調整を行う。色調は浅黄橙色を呈する。

S D012 (第15図)

調査区北東側で確認する。S D002に平行するように掘削されているが出土遺物からは時期的な関

きがある。幅1m、検出面からの深さ15cm前後である。埋土はローム粒を含む暗褐色土で、底面にはやや凹凸が多くなっている。小田編年VI期を前後する須恵器が出土している。23次調査ではこれに対応する溝は確認されていない。

出土遺物（第15図） 図示したのはいずれも須恵器である。50はかえりを有する壺蓋である。天井部の回転ヘラ削りは行われない。51・52は立ち上がりを有する壺身である。52は外面に回転ヘラ削りが行われている。53・54はやや高く外方に張り出す高台を有する壺である。外底は未調整である。55は高台のない壺である。口縁部は外湾気味に広がる。外底面は回転ヘラ削りを行わない。

5) その他の遺物（第16図）

56はS P034出土の土師器柄である。内外面に指頭痕が残る。57～59はS P036出土である。57は柄で外面継刷毛の後ヘラ状工具によるナデ、内面はヘラ削りを行う。58は頁岩質の砥石である。破面まで底面としている。また刃先状の条痕が多く残っている。59は玄武岩製の磨り石で、周縁部全体に敲打痕が認められる。60～63は検出面出土である。60は白磁胎である。61・62は須恵器である。61は焼成不良で淡橙色を呈し、外底はヘラ切り未調整である。63は土師器の把手付き壺である。

6) 小結

今回の調査地点は23次地点の南側隣接地ということで、これに関連する弥生時代～飛鳥時代を中心とする遺構の広がりを押さえるという点に注意を払ったが、調査以前の削平や地形的も南側に落ち込んでいく事などから、遺構の残存状態は予想していたよりも不良であった。なお削平については直近のものだけではなく、飛鳥時代・中世等で想定される建物群等に伴う地形の平坦化も大きな影響を及ぼしているものと考えられる。このような状況の中で今回の調査結果について、23次調査成果とあわせて時期ごとに簡単にたどり、まとめにかえたい。

調査地点周辺は丘陵の西側縁辺部にあたり、今回確認できたように南側には鞍部が形成されており、自然地形として丘陵が西側に張り出した先端部分にあたるところである。弥生時代中期後半～末には23次地点で大溝SD44、大型掘立柱建物SB57を中心として掘立柱建物・竪穴住居跡・土坑等が確認されている。SD44は遺構群の南を限るものと考えられるが、これを越えた本調査地点でもSC013・SK011が確認され、ピットからも同時期の遺物が多く出土している。

古墳時代初頭前後は本調査地点でSE014が確認されているが、これに伴う生活関連遺構は23次調査ではほとんど認められていない。

古墳時代後期には23次調査で50棟を越える竪穴住居跡が確認されている。またこの直後7世紀代には並列した3間×4間の柱建物とこれに並行する溝群が確認されている。溝からは瓦類も出土している。本調査地点では竪穴住居群の延長(SC004・006・007・008)と、7世紀代には溝(SD002・009・012)が確認されている。竪穴住居跡は鞍部境界付近まで濃密に広がっていたものと考えられる。

中世になると溝によって区画された館状の空間として使用されていたようである。本調査地点ではSD001を確認するのみであるが、23次調査ではSE23・101やSD96のほか多くのピットがまとまって確認されている。



写真1 調査区西半部全景（東から）



写真2 調査区西半部堅穴住居跡群（西から）



写真3 調査区東半部全景（西から）



写真4 調査区東半部SC013周辺（南から）



写真5 SC004西半（南から）



写真6 SC004東半・SK010（南から）



写真7 SC007・008（南西から）



写真8 SC013（西から）



写真9 SE014（北から）



写真10 SK003（東から）



写真11 SK011（西から）



写真12 SD001東半（西から）



写真13 SD001土層1

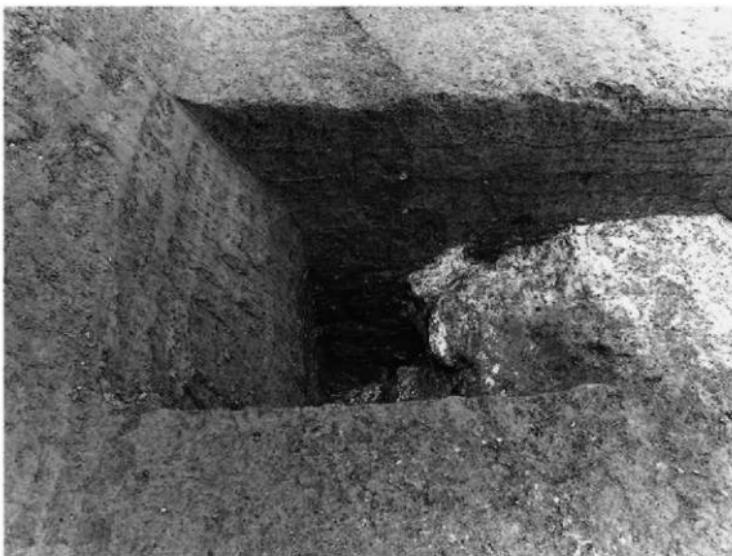


写真14 SD001土層2



写真15 SD002東半（西から）

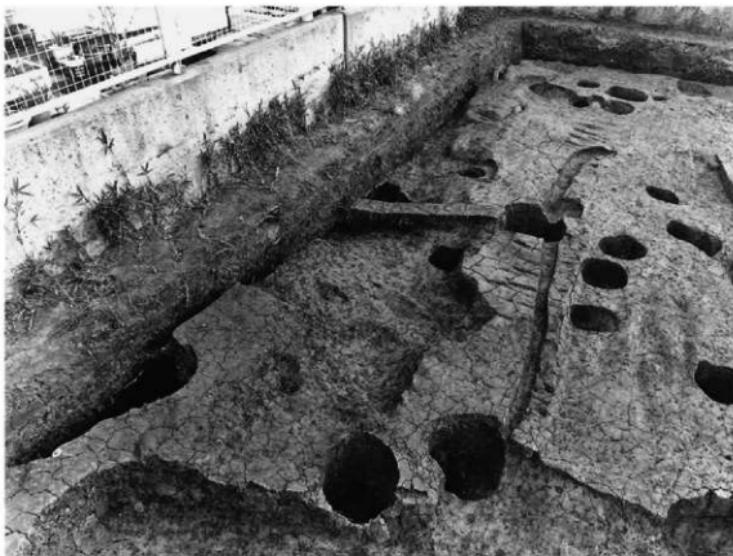


写真16 SD012（西から）

書名ふりがな なかさんじゅうく
書名 那珂39
副書名 -那珂遺跡群第94次調査報告-
巻次
シリーズ名 福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号 843
編監者名 長家 伸
編集機関 福岡市教育委員会
発行機関 福岡市教育委員会
発行年月日 20050331
作成法人ID
郵便番号 810-8621
住所 福岡市中央区天神1-8-1
遺跡名ふりがな なかいせきぐん
遺跡名 那珂遺跡群
所在地ふりがな ふくおかはかたたけした5ちょうめ 283の1、284の1
遺跡所在地 福岡市博多区竹下5丁目 283-1, 284-1
市町村コード 40132
遺跡番号 37-0085
北緯 33° 34' 4"
東経 130° 26' 5" (世界測地系)
調査期間 20040108~20040218
調査面積 250
調査原因 共同住宅建設
種別 集落
主な時代 弥生 古墳 中世
遺跡概要 集落 弥生 - 塗穴住居1+土坑1+ピット、古墳 - 塗穴住居4+溝2+井戸1、中世 - 溝1
特記事項

福岡市埋蔵文化財調査報告書第843集

那珂 39

-那珂遺跡群第94次調査報告-

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

2005年(平成17年)3月31日

☎092(711)-4667

印 刷 株式会社ハザマ印刷

福岡市南区那の川1-20-23

